

第2章 講座記録

邪馬台国と卑弥呼の鏡

本章では、平成23年6月に四條畷市立歴史民俗資料館で行った一連の歴史講座の記録を掲載する。講座は全四回開催し、第1回から3回までが歴史民俗資料館研修室での講座で、第4回は遺跡散策を行った。ここでは講座部分の記録を掲載する。第1回は平成23年6月7日に、原題を「魏志倭人伝の国々—対馬国から邪馬台国まで」として行い、32名の参加があった。本章の第1節がその記録にあたる。第2回は6月14日に行い、32名の参加があった。本章の第2節がその記録にあたる。第3回は6月21日に行い、34名の参加があった。本章の第3節がその記録にあたる。第4回は6月28日に、奈良県天理市・桜井市で纏向遺跡と周辺の古墳を巡る散策を行い、31名の参加があった。ここでは第1回から3回までの講座部分の記録を掲載する。各回に提示した参考文献および用語解説は最後に一括しましてある。

第1節 魏志倭人伝の国々と四條畷—対馬国から邪馬台国まで—

1. はじめに—今回の講座の狙い—

この講座では、まず三回の講座で、邪馬台国とそれを取り巻く国々について、そして卑弥呼が中国からもらったという銅鏡などについて学んでいきます。そして、最後の四回目で、卑弥呼や邪馬台国と関わりが深いと言われる、箸墓古墳や黒塚古墳など、纏向遺跡とその周辺の古墳を見て回ろうと思います。

邪馬台国は、いまだにその所在地も分かっておらず、わたしたちの心をつかんで離さない古代史上の謎の一つです。卑弥呼が中国からもらったという「銅鏡百枚」も同じで、それがどんな鏡なのかはいまだにわかつていません。今回はこれらの謎に、私も含め皆様と一緒に、これまで言われている事柄を学びながら、せまっていきたいと思います。

2. 「魏志倭人伝」とは

「魏志倭人伝」という単語は、皆さんも歴史の授業などで聞かれたことがあるかもしれません。ですが、これが実際に一体どういうものなのかというと、ご存じない方もおられるでしょう。

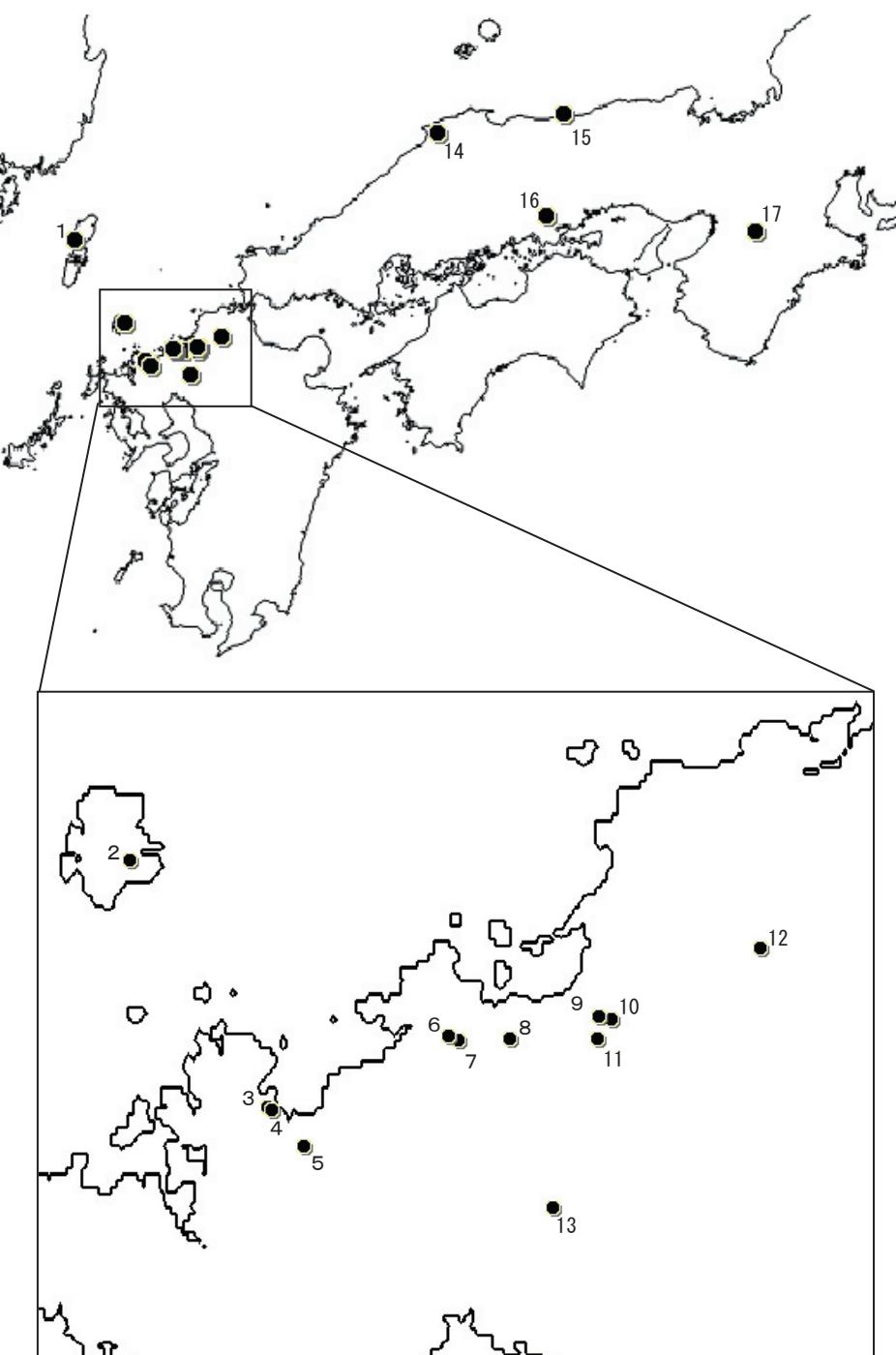
実は、「魏志倭人伝」という本は、本当は存在しません。本当は、中国の有名な歴史書『三国志』の中の、『魏書』という本に、「烏丸鮮卑東夷伝」という章があり、その中の「倭人条」という部分のことを、通称で「魏志倭人伝」と言っています。ここには、当時伝えられた、倭人の習俗や、政治形態、歴史などについて書かれており、書かれた時期からいえば倭人について詳しく触れている最も古い本で、日本の歴史を探る上で非常に重要なものとなっています。ここからは、上記の「倭人条」のことを、分かりやすいように通称で「魏志倭人伝」と呼ぶことにします。

3. 「魏志倭人伝」に載る国々

これから「魏志倭人伝」に載っている国々について、見ていきたいと思います。場所がおおよそ分かっている国については、遺跡の説明も交えながら、見ていきたいと思います。

対馬国 現在の長崎県の対馬にあたります。「魏志倭人伝」には、「居する所絶島にして、方四百余里ばかり」などとあります。山が険しく森が多くて、道は獣道のようである、良い田はなく、海産物を食べ、船で交易している、とあり、対馬の状況と合致しています。千余戸があったとされています。対馬市の木坂石棺群では、弥生時代後期（約1900年前¹⁾）の祭り用具である武器形青銅器などが墓に

¹⁾ ここで述べる弥生時代の実年代については、2010年発行の大坂府立弥生文化博物館図録「邪馬台国—九州と近畿—」の年表に準拠しました。



- | | | | |
|--------------|---------------|----------------------|----------------|
| 1. 長崎県木坂石棺群 | 2. 長崎県原の辻遺跡 | 3. 佐賀県菜畑遺跡 | 4. 佐賀県桜馬場遺跡 |
| 5. 佐賀県宇木汲田遺跡 | 6. 福岡県平原遺跡 | 7. 福岡県三雲南小路遺跡・井原鎧溝遺跡 | |
| 8. 福岡県吉武高木遺跡 | 9. 福岡県板付遺跡 | 10. 福岡県金隈遺跡 | 11. 福岡県須玖岡本遺跡 |
| 12. 福岡県立岩遺跡 | 13. 佐賀県吉野ヶ里遺跡 | 14. 島根県西谷墳墓群 | 15. 鳥取県青谷上寺地遺跡 |
| 16. 岡山県楯築墳丘墓 | 17. 奈良県纏向遺跡 | | |

図 25 今回取り扱う遺跡の位置（カシミール3Dによる）



図 26 現在の佐賀県宇木汲田遺跡（末盧国）



図 27 現在の佐賀県桜馬場遺跡（末盧国）



図 28 佐賀県菜畑遺跡（末盧国）の復元水田



図 29 福岡県三雲南小路遺跡（伊都国）



図 30 福岡県井原鎧溝遺跡推定地



図 31 現在の福岡県平原遺跡

副葬されて出土していて、この島に国があったのは確かなようです。

一支国 現在の長崎県壱岐にあたります。「魏志倭人伝」には、「方三百里」ほどで、竹木の茂る林が多く、三千ほどの家があると書かれています。ここもやはり海を渡り交易していたといいます。このことを証明するように、壱岐市の原の辻遺跡では、弥生時代中期（約2100年前）に作られた港が見つかっています。

末盧国 現在の佐賀県唐津市付近が中心であったと考えられます。「魏志倭人伝」には、末盧国について、「四千余戸有り」とあります。唐津市の宇木汲田遺跡では、弥生時代前期末から中期初頭（約2200年前）にかけての、朝鮮半島からもたらされた鏡や銅剣を副葬した墓が見つかっています。唐津市桜馬場遺跡は、弥生時代後期前半（約2000年前）の王墓で、後漢鏡二面や青銅製品などが副葬されました。また、唐津市菜畠遺跡は、日本で初めて水田での稻作を始めたムラのひとつで、縄紋時代の終わり頃（約2600年前）の水田跡が見つかっています。

伊都国 現在の福岡県糸島市付近が中心であったと思われます。「魏志倭人伝」では、「千余戸有り」とあり、特別人口は多くなかったようですが（ただし「万余戸」だとも言われます）、邪馬台国以外では唯一「世々王有り」と書かれています。また、ここには「一大率」という監察官のような役人の治所があったと書かれており、特別な機能を持っていた国だったようです。魏から使者が遣わされた際は、いつもこの伊都国に滞在していたと書かれています。

代々王がいたことを証明するように、伊都国の範囲内では、糸島市の三雲南小路遺跡、井原鑓溝遺跡、平原遺跡と、時期の異なる三つの王墓が見つかっています。

三雲南小路遺跡は、弥生時代中期後半（約2050年前）の遺跡で、江戸時代に大量の銅鏡が出土しました。長らく場所が不明でしたが、近年の発掘でその場所が再確認されました。ここでは二つの甕棺墓が見つかっていて、それぞれ35面と22面以上の鏡が見つかりました。いずれも前漢の鏡ですが、35面副葬されていた墓のほうがより大きい鏡を副葬していました。また、こちらには前漢からもたらされたガラス製品や棺桶用金具も副葬されました。こちらが王墓で、もうひとつは近親者のものとされています。

井原鑓溝遺跡は、弥生時代後期（約1900年前）の遺跡で、ここも江戸時代に21面の後漢鏡を副葬した王墓が見つかりました。この遺跡は現在詳細な位置は不明ですが、江戸時代の学者青柳種信が出土したものの図面など詳細な記録を残しています。

平原遺跡は、弥生時代終末期（約1800年前）の遺跡で、方形周溝墓から40面もの鏡が割られた状態で見つかりました。そのうち5面の内行花紋鏡は、直径が約46cmもある大きなものでした。副葬品に武器が含まれないこと、装身具が豊富なことなどから、被葬者は女性であったと推定されています。

奴国 現在の福岡県福岡市博多区・春日市付近が中心であったと考えられます。「魏志倭人伝」では、奴国について、「二万余戸有り」とあります。魏志倭人伝に出ている国で、戸数が万を越えているのは、他に投馬国と邪馬台国だけであり、かなり大きな「国」だったと思われます。そのことを裏付けるように、福岡市金隈遺跡では、400基以上の甕棺墓や木棺墓などからなる集団墓地が見つかっています。また、福岡市板付遺跡は、稻作開始のころの集落として著名です。

この奴国の王墓とされるものが春日市の須玖岡本遺跡にあり、明治時代に前漢鏡約30面を副葬した弥生時代中期後半（約2050年前）の甕棺墓が見つかっています。また、江戸時代に志賀島から「漢委奴国王」と記された金印が見つかっています。これは一般的に、「かんのわのなのこくおう」と読まれ、後漢書にある、「倭奴国」が後漢の初代皇帝光武帝から西暦57年にもらった金印のこととされています。

この奴国は青銅器やガラス製品などを作る当時の工業団地のような場所でもあったようで、上記の須玖岡本遺跡を含む春日市の須玖遺跡群では、様々な場所から青銅器やガラス製品の鋳型や、鋳造した後に残るクズなどが見つかっています。

不弥国 現在の福岡県飯塚市付近にあたるとする意見があります。「魏志倭人伝」には、千あまりの家があったとされます。飯塚市の立岩遺跡では、前漢鏡6面などを副葬した弥生時代中期（約2100年前）の甕棺墓が見つかっていて、王の墓と考えられます。またこの遺跡は石庖丁などの石器を製作する拠点だったようで、未完成品が大量に出土しています。



図 32 現在の奴国の様子



図 33 現在の福岡県須玖岡本遺跡



図 34 現在の須玖岡本遺跡青銅器工房跡



図 35 現在の福岡県立岩遺跡



図 36 現在の佐賀県吉野ヶ里遺跡



図 37 吉野ヶ里遺跡の「王族墓」

投馬国 まだ、どこにあったのか分かっていません。「魏志倭人伝」には、「五万余戸」があったとされており、かなり大きな国だったようです。吉備（岡山県）、出雲（島根県）、あるいは肥前（佐賀・長崎県）などに比定されています。

4. 邪馬台国への道

次に、この時代の、魏志倭人伝に載る国以外の遺跡を見てみましょう。ここでは、北部九州・山陰・山陽・畿内について、見ていきたいと思います。

はじめに、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡を見てみましょう。ここは、弥生時代後期（約1900年前）を中心とした集落遺跡です。遺跡は居住域のほか、首長の居館や市と考えられる部分がありました。墓地も見つかっていますが、「王族」のものと考えられる副葬品の豊富な甕棺墓だけが、墳丘を持った墓に葬られていました。

次に、福岡県の吉武高木遺跡があります。ここでは、弥生時代中期初頭（約2200年前）の、朝鮮半島の鏡や銅剣などを副葬した墓が見つかっており、王墓の初現ともされます。少し離れていますが、ここも奴国的一部だとする意見もあります。

次に、島根県の西谷墳墓群を見たいと思います。西谷墳墓群は、弥生時代後期（約1900年前）の、出雲地方を治めた首長の墓といわれる墳墓群です。ここでは、中国山地と山陰、そして北陸地方にしか見られない「四隅突出型墳丘墓」という墓が作られています。何代かにわたって墳墓が作られており、山陰地方には独自の文化を持つ勢力がいたのかもしれません。

鳥取県の青谷上寺地遺跡は、弥生時代後期（約1900年前）を中心とした集落遺跡で、弥生時代の人の脳が見つかった遺跡として著名です。ここでは集落を囲う環濠で、多くの人骨が折り重なるように見つかりました。その中には骨にまで達する傷を負ったり、矢じりが刺さったりしたままの骨もあり、戦いで殺された人々がそのまま葬られることなく溝に投げ込まれたものようです。「魏志倭人伝」には、卑弥呼が王として立てられる前に、「倭国大乱」があり、国々が争いを何年も続けていたとあります。この遺跡はそのことを示す遺跡だといえるでしょう。

岡山県の楯築墳丘墓は、弥生時代後期後半（約1850年前）のもので、直径40mの円形部分の両側に突出部がつき、全長80mほどになるとされています。この時期の墳墓としては卓越した規模を持っています。発掘調査では、埋葬施設から鉄剣や勾玉・管玉などの玉類が見つかりました。円形部分の墳丘上には、大石が立て並べてあります。また、かつては墳丘上にあった楯築神社のご神体として、「弧帶紋石」と呼んでいる紋様の彫り込まれた石が現在でも祀られています。

奈良県の纏向遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代前期（約1800～1700年前）にかけての集落遺跡と墳墓・古墳群です。最盛期である古墳時代初頭の遺跡の面積は2.7km²におよびます。近年遺跡の中心域で大型建物が整然と並んでいるのが明らかになり、話題を呼びました。

橋本輝彦によれば、纏向遺跡には竪穴式住居はほとんど存在しないといいます。纏向遺跡で確認されている竪穴式住居は合計三棟で、いずれも纏向遺跡が廃絶へと向かう古墳時代前期（約1700年前）のものだそうです。このことから、纏向遺跡に住んでいた人々は、平地式や高床式などの建物に居住していましたとされています。平地式や高床式の建物は、身分の高い人物にのみ用いられたと考えられますが、それが纏向遺跡では普遍的に見られる居住形態となっています。このことから、纏向遺跡に居住していた人々はいわゆる身分の高い人物を中心としていたと言えるでしょう。この遺跡は「ムラ」の範疇を超えた「王都」のようなものであったと考えられます。

5. 邪馬台国と四條畷

九州で伊都国や奴国が栄えていたころ、四條畷では雁屋遺跡が、北河内地域の拠点的な集落として栄えていました。雁屋遺跡は、弥生時代中期（約2100年前）の方形周溝墓の発掘が著名で、1985年度の旧畷生会病院建設の時の調査では4基の方形周溝墓から合計21基の埋葬施設が見つかり、遺存状態の良い当時の木棺や人骨が多数見つかった遺跡です。

弥生時代後期（約1900年前）の雁屋遺跡では、1985年度の旧畷生会病院建設の時の調査で周溝墓が確認されており、そこで出土した土器から、丹後・出雲・近江などの地域と交流を持っていたこと



図 38 現在の福岡県吉武高木遺跡



図 39 現在の島根県西谷墳墓群



図 40 鳥取県青谷上寺地遺跡の展示館



図 41 現在の岡山県楯築墳丘墓



図 42 現在の奈良県纏向遺跡



図 43 雁屋遺跡出土の播磨（兵庫県）の土器

が分かりました。また、2010年に宅地開発に伴って行った調査では、播磨地域との交流を示す弥生時代中期後葉の土器が見つかりました。このように様々な地域と交流を持っていたことは、雁屋遺跡が単なる一集落にとどまらず、この地域一帯における拠点であったことを示しています。

6. 邪馬台国の位置—九州説と畿内説—

さて、それでは、ここから邪馬台国へと歩みを進めてみたいと思います。邪馬台国のある場所については、様々な意見があり、まだわかっていないません。大きく分けると、北部九州説、畿内説、それ以外の場所説の三つの説があります。このうち有力なのは、北部九州と畿内の二つの説です。

これら二つの説を対比するには、「魏志倭人伝」の内容を頭に入れておくことが必要です。特に注意しておきたいのは、邪馬台国の人囗、そしてその位置に関する記述です。

それぞれの説の概略を見ていきましょう。北部九州説は、はじめ江戸時代の新井白石によって唱えられたものです。明治時代に東京大学の白鳥庫吉が、「魏志倭人伝」の記述のうち、朝鮮半島の帶方郡から女王国までが一万二千里（当時の中国の1里=434m）あまりと書いてあることに注目しました。魏志倭人伝に距離の載っている帶方郡から不弥国までの距離を足すと一万七百里あまりとなるので、不弥国から女王国は千三百里となります。それで、邪馬台国は九州としか考えられないとして、その場所を肥後（熊本県）と想定しました。

次に考えておきたいのは、榎一雄の説です。彼は、邪馬台国への行程の記事のうち、伊都国までとそれ以降とで書き方が異なることに注目しました。彼は、魏の使者は伊都国にとどまっていると書かれていることもあり、伊都国以降は、すべて伊都国起点での距離や日数が書かれていると考えました。こうして考えると、やはり邪馬台国は九州に収まることになります。

もうひとつ、安本美典の説を考えて見ましょう。彼は、位置の分かっている国までの、「魏志倭人伝」にかかる距離と、実際の距離とを比較して、そこから「魏志倭人伝」に書かれている距離は当時の中国の単位ではなく、1里=約90mで書かれているとしました。この考えに従えば、邪馬台国的位置は無理なく九州に収まります。また、行程の記事以外の部分でも、「女王国が伊都国の南にある」と書いてある部分があることをあげ、やはり邪馬台国は九州の範囲内にあったと考えました。

次に、畿内説について見てみます。畿内説を最初に主張したのは、おそらく『日本書紀』の編者でしょう。実は、『日本書紀』には、魏志倭人伝の卑弥呼の記述が引用されています。仲哀天皇の後の神功皇后について書かれた部分で、卑弥呼のことが述べられており、『日本書紀』の編者は卑弥呼を神功皇后のことと考えたものと思われます。

それから、畿内説は連綿と唱えられ続けます。明治時代には、京都大学の内藤虎次郎が、中国の歴史書には、記述される方角に誤りがあることがよく見られる事を示しました。そして、「魏志倭人伝」に邪馬台国は「七万余戸」の人口の大國と書かれていることから、九州の北部から中部には求められず、その記述の「南」は「東」と読み替えるべきだと考え、邪馬台国はやはり大和であるとしました。

考古学者の水野正好は、「魏志倭人伝」に、「邪馬台国」とある部分と「女王国」とある部分があることに注目しました。この中で、帶方郡からの総距離が書かれている部分は、「女王国」までが一万二千里あまりだと書いてあります。一方で、投馬国からの行程の部分の記述では、「水行十日、陸行一月、邪馬台国に至る」とあります。このことから、「邪馬台国」とは、卑弥呼の王都がある地のことで、「女王国」は、卑弥呼の直接統治が及んでいる範囲であるとしました。九州の国々については、伊都国に置かれた「一大率」を通じて、女王国に属していたものと考えました。こうして考えれば、投馬国から船では十日、陸では一月の位置にある邪馬台国は畿内の大和ということになります。

ここまで、邪馬台国北部九州説と、畿内説のそれぞれについて概観してみました。邪馬台国はいったいどこにあったのでしょうか？

ところで、ここまで見てきた考えは、すべて文献上の記載に基づいて唱えられた説です。では、考古学上の発掘成果からはどのように考えることができるでしょうか。この際に重要なのが銅鏡です。次回は、銅鏡から邪馬台国について紐解いていく前段階として、銅鏡にはどういった種類があるのか、そしてそれらの鏡にはどんな意味があるのか、調べることにしたいと思います。

第2節 邪馬台国と青銅鏡—弥生時代・古墳時代の鏡—

1. はじめに

ここまで、「魏志倭人伝」に載る国々について、そして邪馬台国の位置は文献からどのように想定されているのかについて、調べることができました。本節では、邪馬台国について考えていくうえで欠かせないものである青銅鏡について、少し調べてみたいと思います。

2. 青銅鏡とは

青銅製の鏡は、木製品のように土中で朽ち果てることもなければ、鉄製品のように元の形が判らなくなってしまうほど鋤びるということをあまりなく、美しい紋様を保ったまま出土するため、古くから注目されていた遺物のひとつです。わたしたちは、現在でこそガラスに金属等を塗ったものを鏡として使っていますが、明治時代ごろまでは鏡といえば金属製、それも青銅でできたものが中心でした。青銅というのは、銅と錫などを混ぜて作った金属です。身近なものでは現在の十円硬貨が青銅製です。青銅は銅と錫の比率によって色が変わり、銅の比率が高いと（9割程度以上）十円玉のような赤銅色に、銅の比率が相対的に低めだと白銅色になり、その中間の比率だと黄銅色になります。弥生から古墳時代の鏡は、白銅～黄銅色のものが多かったようです。

この青銅でつくった鏡は、中国大陆や朝鮮半島で作られたものが弥生時代になって初めて日本列島にもたらされました。当時の日本列島（倭）の人々は、光り輝く銅鏡に神秘的なものを感じたようで、墓に大量に副葬したり、割れた鏡をさらに磨いて儀式などに使用したりと、大陸とは違った使われ方をしている例が多くあります。

3. 銅鏡に関する用語

鈕：中央にある、つまみのように盛り上がっている部分。紐を通すあな（鈕孔）があいています。

鈕座：鈕が乗っている、鈕の周りの高まりです。

内区：鈕座の外側の、紋様が描いてある部分。鏡の名称の元となる、神や獣などの紋様（主紋様）が描かれている部分です。

外区：内区よりもさらに外側の部分で、内区より一段高くなっていることが多い部分です。

乳：内区の中にある小さな突起のようなもの。内区の中を区画に分ける意味を持つものです。

4. 鏡の種類と意味

それでは、鏡の種類と、それぞれの鏡の紋様が持つ意味について、弥生時代の遺跡で見つかる鏡から、古墳時代の三角縁神獣鏡まで、古い時代のものから順番に見ていきましょう。日本列島で出土する鏡について、見ていきたいと思います。

多鈕細紋鏡 朝鮮半島で作られた鏡です。紐を通す穴のある鈕が二つあることと、紋様が非常に細かいものになっていることから、この名があります。日本列島では主に弥生時代中期前半（紀元前2世紀）の遺跡から見つかります。福岡県吉武高木遺跡や、佐賀県宇木汲田遺跡では、甕棺墓に副葬されていて、日本列島における王墓の初現とされています。また、柏原市大畠遺跡では、大正時代の開墾中に、単独で埋められていたものが見つかっています。

異体字銘帶鏡 前漢代（紀元前2～1世紀）に中国で作られた鏡です。銘文が「ゴシック体」などと表現される、特徴的な字体で書かれているため、この名があります。銘文が書いてある部分である「銘帶」が1列のものと2列のものがあります。1列のものの中には、銘帶よりさらに内側に半円形の紋様を連ねたもの（内行花紋）があるものがあり、これは後に述べる内行花紋鏡の元となりました。「魏志倭人伝」に載る伊都国の王墓のひとつである福岡県の三雲南小路遺跡や、不弥国に比定する意見もある福岡県立岩遺跡などから出土しています。

方格規矩四神鏡 前漢の終わりから後漢にかけて（前1世紀から後2世紀）中国で作られた鏡です。「方格」は、内区にある鈕を囲う四角形の部分のことです。「規矩」というのは、物差しとコンパスのことで、紋様の中にあるアルファベットのT、L、Vに似た形をした図形が、「規矩」を表していると

考えられたため、この名があります。「四神」は、青龍・白虎・朱雀・玄武のことで、それぞれ東西南北を表す中国の聖獸です。方格規矩四神鏡には、この四神を含め、様々な中国の聖獸が描かれています。弥生時代終末期（約1800年前）の伊都国の王墓である福岡県平原遺跡で出土した鏡のなかで最も多かったのはこの種類の鏡です。茨木市紫金山古墳では、この鏡が4世紀後半の古墳から副葬品として見つかっていて、何代にもわたって大切に伝えられてきた鏡（伝世鏡）だともいわれています。

内行花紋鏡 後漢の時代（1世紀から2世紀）に中国で作られた鏡です。内区には半円形の紋様があり、これを花びらに見立てて、花のような紋様ということでこの名で呼んでいます。福岡県平原遺跡の、約46cmある日本最大の銅鏡はこの種類の鏡ですが、日本列島で作られたものとされています。

画紋帶神獸鏡 後漢の終わり頃から三国時代にかけて（2世紀から3世紀）、中国で作られた鏡です。その縁は平らなので「平縁」といいます。「画紋帶」とは、外区部分に天上の世界を表した画像が描かれた紋様帶のことです。内区には神や聖獸が描かれているので、「神獸鏡」といいます。多くは中国大陆の南方の吳の地域で作られたものです。奈良県の黒塚古墳では、画紋帶神獸鏡1面だけが、棺の中に副葬されており、被葬者が大事にしていた鏡だったことが窺えます。一方で、内区の紋様がすべてひとつの方向を上にして描かれている画紋帶同向式神獸鏡という種類のものは、大陸北方の地域で作られたものと考えられます。この画紋帶同向式神獸鏡は、奈良県のホケノ山古墳などから出土しています。

斜縁神獸鏡 中国で三国時代（3世紀）に作られた鏡です。一番外側の縁の断面が、平縁と比べて少し盛り上がっていますが、三角縁のように二等辺三角形ではなく、緩やかな立ち上がりのものを「斜縁」といい、内区には神や聖獸が描かれているので「神獸鏡」と呼んでいます。この鏡は中国の山東半島から遼東半島、朝鮮半島の平壌にかけての地域で作られた鏡です。高槻市の安満宮山古墳などから出土しています。

5. おわりに

ここまで、弥生時代・古墳時代の日本列島で見られる主な鏡について概観してきました。しかし、卑弥呼が中国からもらったといわれる鏡がどんなものだったのかについては、あえて触れませんでした。この点に関しては次回、考えてみることにしたいと思います。

第3節 卑弥呼の鏡とその後—三角縁神獸鏡と古墳時代—

1. はじめに

前節で、青銅鏡にはどういった種類があるのか、そしてその紋様にはどのような意味があるのか、調べることができました。

今回は、卑弥呼が中国からもらった鏡について、そしてその後の鏡の展開について、考えてみたいと思います。

2. 三角縁神獸鏡と倭製の鏡

まず、卑弥呼が中国からもらった鏡を考える前段階として、重要な鏡である三角縁神獸鏡について、そして鏡には中国で作られた鏡だけではなく、日本列島で作られた鏡もあるということについて、見ておきたいと思います。

三角縁神獸鏡は、中国の三国時代、日本では弥生時代の終末期から古墳時代のはじめにかけての時期（3世紀）に作られた鏡です。一番外側の縁の断面が二等辺三角形に近い形で、内区には神や聖獸の像が描かれているので、三角縁神獸鏡と呼んでいます。現在のところ日本列島でしか出土していません。3・4世紀の古墳時代前期の古墳の副葬品としての出土がほとんどです。奈良県の黒塚古墳では、33面の三角縁神獸鏡が棺の外に立て並べて副葬されており、出土面数・出土状況とともに注目されました。

青銅鏡の中には、日本列島で中国製の鏡を模倣した鏡が作られたものもあります。当時日本のこととは倭と呼ばれていたので、そういった鏡のことを「倭製鏡」といいます。また、製作地を限定せず、

元の鏡をまねて作った鏡のことを、「倣製鏡」と呼びます（以前は、これらをすべて「仿製鏡」と呼んでいました）。倭製鏡は、中国鏡の紋様の意味をよく理解できていない倭の人々が作ったので、紋様が元の鏡からは想像もつかないほど変化してしまっているものも多くあります。

さて、三角縁神獸鏡は、まだ製作された場所が分かっていない鏡です。中国製とする意見と、日本列島製とする意見とがあります。中国製とする意見は、古く大正時代に、京都大学の富岡謙蔵が、鏡の紋様の特徴と、銘文に魏代にならないと使われない後漢の皇帝の諱が使われていること、「正始元年」（240年）という魏の年号がある鏡があることから、述べていたものです。この説は京都大学の梅原末治、小林行雄によって継承され、小林は三角縁神獸鏡に多く見られる、細部まで同じ紋様を持つ鏡を、同じ鋳型を使って鋳造した「同范鏡」だと考え、その同范鏡の日本列島への広がり方から、三角縁神獸鏡は卑弥呼が魏に使いを出したときにもらってきた鏡を、のちに各地の首長に大王が部下を通じて配布したものだと考えました。三角縁神獸鏡を、卑弥呼が魏からもらった鏡とする説は、島根県の神原神社古墳で卑弥呼の遣使年である「景初三年」（239年）の年号が書かれた三角縁神獸鏡が出土するに及んで、確立されたかに見えました。

一方で、この鏡は中国大陆で1枚も出土していないため、同志社大学の森浩一は早くから日本列島製ではないかと主張していました。1980年代に中国の研究者の王仲殊は、三角縁神獸鏡の元になったとされる種類の鏡は、魏の地域では作られておらず、呉の地域で作られている鏡であるとしました。彼は三角縁神獸鏡にある銘文を「絶地亡出」「至海東」と読み、これは遠く東の地に亡命したことを示す銘文だと解釈して、三角縁神獸鏡は、呉から倭に亡命した工人が倭で作った鏡だと考えました。

1986年には、京都府の広峰15号墳で、「景初四年」という、実際にはなかったとされる年号の書かれた鏡が見つかりました。この鏡は、三角縁神獸鏡ではありませんが、三角縁神獸鏡に非常に近い鏡で、同じ工人が作ったと考えられるものでした。この鏡は、日本列島にいた改元を知らなかった工人が作ったものとされて、三角縁神獸鏡が中国製でない証拠とされました。

しかし、三角縁神獸鏡は呉の系譜をもつ鏡ではないということが、近年明らかになってきました。三角縁神獸鏡の鉢孔を見ると、その多くは長方形をしています。これは、他の種類の鏡にはあまり見られない特徴です。大阪大学の福永伸哉によれば、これと同じ特徴をした鏡が中国でも見つかっています。それは方格規矩四神鏡なのですが、漢代のものとは、紋様の「L」字の向きが逆であるなど、少し異なる部分があって、漢代のものを模倣した鏡であると考えられます。中国大陆での出土分布から、これらの方格規矩四神鏡は、魏の地域で作られた鏡であることが分かりました。この長方形鉢孔というのは、魏の地域で作られた鏡の特徴のひとつであるようです。

また、これまで北方の地域の鏡ではないとされていた神獸鏡は、北方の地域にも存在することが分かってきました。斜縁神獸鏡は、その分布から見ると山東半島から遼東半島・朝鮮半島の平壌にかけての地域で作られた鏡ですし、画紋帶同向式神獸鏡についても、北方に主に見られる鏡です。これらの鏡は、三角縁神獸鏡の元になったと考えられる鏡のひとつであり、こういった鏡を模倣して、様々な要素を取り出し合体させ、作り出されたのが三角縁神獸鏡と考えられます。このようにそれ以前の鏡を模倣し、鏡を作るというのは、先の方格規矩四神鏡の例にも見られるように、魏の鏡の特徴であり、その特徴を三角縁神獸鏡も持っているということができます。一方で、呉の地域の鏡は、紋様の表現のやり方も三角縁神獸鏡とは異なっていますし、同じ系譜にあるとみなすことは困難です。三角縁神獸鏡は、やはり魏の工人により作られたと考えができるでしょう。

3. 卑弥呼がもらった「銅鏡百枚」

たとえ魏の工人が作ったとしても、「景初四年」という年号がそれらの鏡に入っているのは確かです。ですが、改元の布令が徹底していたと考えられる中国でも、改元前の年号を使ってしまっている例は、お墓に使うレンガなどで、確かに存在します。またこの時期は、景初三年1月に魏の皇帝（明帝）が亡くなってしまった次の皇帝が即位しましたが、毎年新年を祝うべき正月が前の皇帝の忌日になってしまっては具合が悪いというので、翌年の1月を「景初三年後12月」として先帝の忌日とし、次の月を「正始元年1月」として改元するという複雑な改元が行われています。史書に記述されている経緯でさえこれほど複雑になっていますから、当時のリアルタイムの実務段階では相当複雑なやり取りがあつただ

ろうと考えられます。こうした中にあって、景初四年銘の鏡が作られてしまった可能性は、十分ありえるのではないかでしょうか。

このように考えてきますと、三角縁神獣鏡を魏の鏡と考えない積極的な理由は、存在しないと言えます。むしろ三角縁神獣鏡は魏の鏡である特徴を備えていますので、魏の鏡であり、卑弥呼の遣使の年およびその翌年の年号がある鏡が存在することから、やはり卑弥呼が魏からもらったのは、三角縁神獣鏡だと考えるべきでしょう。

では、「百枚」という記述についてはどうでしょうか。三角縁神獣鏡は、日本列島すでに500枚ほど出土していますので、多すぎると言われることがあります。ですが、三角縁神獣鏡にはいくつかの段階があり、各段階によって作られている鏡の特徴は少し異なっています。この各段階は、鏡が作られた時期の違いをあらわしていると考えられます。日本列島では副葬されている鏡の時期ごとに古墳の時期も違っているということが分かっていますので、鏡の時期ごとに、日本列島へもたらされた時期も異なるのではないかと考えられます。つまり、最初に卑弥呼が魏からもらった「銅鏡百枚」は、三角縁神獣鏡の最初の段階のものだけで、それから何度か卑弥呼や後継者の台与が、魏やそれに続く王朝の西晋に遣使している際にも、各段階の三角縁神獣鏡がもたらされたと考えることができるでしょう。

この三角縁神獣鏡は、近畿地方を中心に分布しています。三角縁神獣鏡の分布から見ても、邪馬台国は畿内にあった可能性が高いといえるでしょう。この視点は、仮に三角縁神獣鏡が倭製だったとしても、三角縁神獣鏡に遣使のときの年号がある以上、成立すると言えます。

4. 卑弥呼の鏡のその後

このように、三角縁神獣鏡は卑弥呼や台与が中国からもらった鏡であることが分かりました。中国からもらった三角縁神獣鏡は、「魏志倭人伝」にあるように、「ことごとく國中の人に」示したと考えられます。その証拠が、三角縁神獣鏡が日本列島のいたるところで見つかっていることにあらわれているでしょう。ですが、三角縁神獣鏡は、古墳での取り扱われ方は少し特殊です。特に副葬される鏡の数の多い古墳では、三角縁神獣鏡以外の鏡のほうが、棺内に入れるなど大事に取り扱われ、三角縁神獣鏡は棺外に副葬されるというような例が多く見られます。副葬面数の多い古墳の被葬者は、有力者ですから、三角縁神獣鏡を王権中枢から下賜される以前にも、別の鏡を下賜されるなりして手に入れていたことでしょう。そのようにして昔から手元に置いていた鏡は、その被葬者にとっては、個人的な意識としては魏の鏡以上に価値のある鏡であったことだと思います。三角縁神獣鏡より被葬者に重要視された鏡を見ますと、方格規矩四神鏡や内行花紋鏡など、三角縁神獣鏡より古い鏡が多く見受けられます。このことも、そのように手に入れた時期の差があったことを示しているのかもしれません。

三角縁神獣鏡は、魏を継いだ西晋に入っても、作られ続けます。早稲田大学の車崎正彦も述べていますが、これまで「倭製（仿製）」三角縁神獣鏡だとされていたものが、その西晋の三角縁神獣鏡だと考えられます。これまで「倭製（仿製）」とされていた三角縁神獣鏡は、紋様を見ると神や獸の像を、しっかりとそれと認識して描いてあります。しかし倭で作られた他の種類の鏡は、神や獸がそれとしっかり認識されず、まるで虫のような描かれ方をされています。倭で作られたほかの種類の鏡と、これまで「倭製（仿製）」とされていた三角縁神獣鏡とは、はっきりとした差があります。

313年に倭と中国との玄関口だった楽浪郡・帶方郡が高句麗に滅ぼされ、三角縁神獣鏡は列島に流入しなくなり、終焉を迎えたと考えられます。列島でも鏡の位置づけは変化し、鏡の大量副葬は減って、代わって鉄製品が大量に副葬されるようになっていきます。三角縁神獣鏡がその役割を終えるころには、大王の墓も、作られる場所が大和から河内へと移ります。こうして、三角縁神獣鏡は、王権内での変化とともに、その役割を終えていったといえるでしょう。

5. おわりに

ここまで三回の講座で、第一回目では魏志倭人伝に載る国々と、当時の日本列島の各遺跡の状況について、そして当時の四條駿の状況についても学びました。二回目では、前回の続きで文献から読める邪馬台国の位置について調べ、青銅鏡にはどんな種類があるのかについても、学ぶことができまし

た。そして最後に、卑弥呼が魏からもらった鏡は三角縁神獸鏡であった可能性が高いことを様々な理由から調べ、そしてその後の展開についても考えることができました。ですが、今回お話をさせていただいたのはひとつの視点を示させていただいたものであり、他の様々な考えを否定するつもりはありません。邪馬台国について、そして卑弥呼がもらった鏡については、いまだに分からぬというのが正直なところとして、それぞれの方が自分なりに、ご自分の中で説明をつけてご自分の邪馬台国論を構築すれば、それが正しいことになるだろうと思います。そうやって自分なりに説明をつけていく作業はある意味非常に楽しいもので、それがわたしたち古代史・考古学ファンの心を捉えて離さない点だと思います。今回は、皆様とご一緒に邪馬台国について、そして卑弥呼がもらった鏡について考えることができ、わたしも自分なりの考えをある程度まとめることができました。皆様はいかがでしたか？この度はどうもありがとうございました。

(實盛良彥)

付編．用語解説

前漢・後漢（ぜんかん・ごかん） 前漢は、紀元前 202 年～西暦 8 年まで、後漢は西暦 25 年～220 年まで続いた、中国の王朝。司馬遼太郎の小説「項羽と劉邦」で有名な劉邦が前漢の初代皇帝です。後漢は、前漢の皇族が、前漢を復興する形で興した王朝です。この時代のことを扱った歴史書に、日本列島に関することが初めて出てきます。

三国時代（さんごくじだい） 中国で、魏・吳・蜀の三国が分立していた時代。魏の建国の 220 年から、魏を継いだ西晋が呉を滅ぼし中国を統一した 280 年までを指します。

魏（ぎ） 220 年～265 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は曹丕で、その父は三国志で有名な曹操。

吳（ご） 229 年～280 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は三国志にも登場する孫權。

蜀（しょく） 221 年～263 年まで続いた中国の王朝。初代皇帝は、後漢の皇族の子孫とされる、三国志で著名な劉備。正式な国号は漢で、蜀はもともと魏を正統としてみた場合の呼び方だったのが定着したもの。

弥生時代（やよいじだい） 今からおよそ 2500 年前から 1750 年前にかけての時期をさします。一般的に、稻作がはじまり、身分の差が広がっていって各地にリーダーが生まれ、やがて「国」へと発展していく時代になります。卑弥呼は、この時代の一番終わりのころに活躍したと言われています。

方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ） 弥生時代の中期（約 2100 年前）以降よくみられる、四角形に溝を掘り、掘った土を真ん中の四角形の部分に積み上げて作るお墓です。土を積み上げたその中に墓穴を掘って棺桶を埋めます。

古墳時代（こふんじだい） 3 世紀中ごろから、7 世紀まで続く時代で、支配者などの巨大なお墓（古墳）が作られたのが特徴の時代です。

主要参考文献

石野博信・水野正好ほか 2006『三角縁神獸鏡・邪馬台国・倭国』新泉社。

江野道和編 2006『大鏡が映した世界』伊都国歴史博物館。

王仲殊 1992『三角縁神獸鏡』学生社。

大阪府立近つ飛鳥博物館編 1995『鏡の時代—銅鏡百枚—』大阪府立近つ飛鳥博物館。

大庭脩 2001『親魏倭王』増補新版、学生社。

岡部祐俊ほか編 2007『国宝福岡県平原方形周溝墓出土品図録』伊都国歴史博物館。

岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第 67 卷第 5 号、史学研究会、1－42 頁。

岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集、国立歴史民俗博物館、39－82 頁。

岡村秀典 1999『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館。

春日市奴国の丘歴史資料館編 2005『春日市奴国の丘歴史資料館常設展示図録』春日市奴国の丘歴史資料館。

鐘ヶ江一朗編 2000『安満宮山古墳』高槻市教育委員会。

唐津市末廬館編 1993『からつ末廬館—菜畑遺跡—』唐津市末廬館。

車崎正彦 1999「卑弥呼の鏡を求めて」『邪馬台国を知る事典』東京堂出版、366－408 頁。

考古学ジャーナル編集委員会編 2011『月刊考古学ジャーナル』No.611、特集「倭人伝」國邑の考古学、ニュー・サイエンス社。

小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店。

小林行雄 1965『古鏡』学生社。

小山田宏一 1993「画紋帶同向式神獸鏡とその日本への流入時期—鏡からみた「3世紀の歴史的枠組み」の予察—」『弥生文化博物館研究報告』第2集、大阪府立弥生文化博物館、231—270頁。

近藤喬一 1988『三角縁神獸鏡』東京大学出版会。

近藤義郎 2002『桶築弥生墳丘墓』吉備人出版。

坂田邦洋編 1976『対馬の考古学』縄文文化研究会。

鹿野 墜編 2009『卑弥呼死す、大いに冢をつくる』大阪府立近づ飛鳥博物館。

四條畷市教育委員会編 2005『青い鳥が飛ぶ』第20回記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。

實盛良彦 2009「斜縁神獸鏡の変遷と系譜」『帝釈峠遺跡群発掘調査室年報』XXIII、考古学研究室紀要第1号、広島大学大学院文学研究科帝釈峠遺跡群発掘調査室・考古学研究室、97—120頁。

實盛良彦・谷口早季 2010『ひろしまの鏡と考古学』広島大学考古学同好会。

高橋伸幸編 2011『歴史人』5月号、N.O.8、KK ベストセラーズ。

武光 誠・宮地 忍 1998『魏志倭人伝と邪馬台国』読売新聞社。

常松幹雄 2006『最古の王墓 吉武高木遺跡』新泉社。

寺沢 薫 2000『王権誕生』講談社。

富岡謙蔵 1920『古鏡の研究』丸善。

橋本輝彦編 2007『ヤマト王権はいかにして始まったか』財団法人桜井市文化財協会。

樋口隆康 1979『古鏡』新潮社。

福永伸哉 2001『邪馬台国から大和政権へ』大阪大学出版会。

正岡大実・中川二美編 2010『邪馬台国』大阪府立弥生文化博物館・九州国立博物館。

水野正好・白石太一郎・西川寿勝 2010『邪馬台国—唐古・鍵遺跡から箸墓古墳へ』雄山閣。